

5月24日、総領事公邸にて「JETプログラムを活用しての交流事業展開について」とのテーマで第4回日本語教育シンポジウムを実施しました。本シンポジウムの目的は当地の日本語教師と今年7月に日本へ出発予定の新規JETプログラム参加者との交流の場を設け、どのように日本と当地の学校の間での交流プログラムを開始させるかを議論するものであり、日本語教師、JETプログラム関係者の他、ワシントン州教育省代表者やシアトル学区代表者等が参加しました。シンポジウム最後に行われたQ & Aセッションでは新規JETプログラム参加者から積極的な質問が出され、シンポジウム後に開かれたレセプションでも日本語教師、新規JETプログラム参加者を含む参加者が情報・意見交換を活発に行いました。



シンポジウム概要

(1) 加藤亮氏（現JETプログラム参加者（CIR*¹））による発表

現在CIRとしてJETプログラムに参加していますが、自分が教えている生徒に少しでも英語をおもしろいと感じてもらえるよう、自分が育ったシアトル近郊にある学校と日本の学校との間でペンパル・プログラムをはじめました。このプログラムには自分の他のJETプログラム参加者も加わっています。そして、ペンパル・プログラムからはじまった試みは広がりをみせ、ビデオ・レターを作成するまでになりました。ビデオ・レターを通してのコミュニケーションはインターネット環境や時差に関係なくできるので重宝しています。

シアトルから派遣されるJETプログラム参加者については、当地の日本語教師とのコミュニケーションがスムーズにいくようにすることが重要であると

思います。

(2) 田邊充博氏 (J-LEAP プログラム*² 参加者 (ルーズベルト高校日本語指導助手)) による発表

交流プログラムとしての J-LEAP プログラムの目的紹介：日米関係の強化を目的とした J-LEAP プログラムでは、米国における日本語教育のサポートをし、同時に日本語教師の育成も行っています。

正規の日本語教師と日本語指導助手である J-LEAP プログラム参加者の二人で授業を行うことにより、生徒はより充実した内容の日本語及び日本文化を学んでいます。日本語の授業においては、日本語のみを使っており、生徒が日本語に触れる機会をより多く提供するようにしています。

(3) ブラウン弥生女史 (ユニバーシティプレップ高校日本語教師、ワシントン州日本語教師会前会長) による発表

ア. 人物交流型交流プログラム (例：当地の生徒が実際に日本の姉妹校を訪問するプログラム) についての説明：人物交流型交流プログラムを通して日本語を勉強している当地の生徒が日本へ行くことにより、生徒はそれまで教室でしか使ったことのない日本語を使って日本の文化に実際に触れることができる他、日本から帰国した後は日本語を勉強する意欲が向上する等、人物交流型の交流プログラムには数々の利点があります。

交流プログラムをスタートさせるためには、相手校となる日本の学校との連携を深めなければならず、そのためには数多くのコミュニケーションを図る等、多くの努力が必要です。



（４）キム・ロバーツ女史（ワニタ高校日本語教師）による発表

自国滞在型交流プログラムについての説明：もし日本の学校と交流プログラムをはじめたくても予算及びその他の制約により、生徒を当地から日本に連れていけない場合でも、インターネットを使った交流プログラムを設けることができます。

自分は「つなが～る」という無料のウェブサイトを授業で使い、日本の学校との交流を行いました。同ウェブサイトは利用者のスクリーニングが行われおり、生徒が安心して使えるようになっています（ただし、生徒が利用するためには親の承諾が必要）。生徒は日本語で書いた文章を「つなが～る」に掲載して日本の生徒と情報交換ができる他、同じ学校にいる他の生徒が書いた日本語の文章を直し合ったりすることで生徒間の相互学習の場となっています。

（５）パネルディスカッション及びＱ＆Ａセッション概要

モデレーター：加藤眞司氏（ワシントン大学科学技術プログラム上級講師）

パネリスト：加藤亮氏、田邊充博氏、ブラウン弥生女史、キム・ロバーツ女史、田染多江子女史（ルーズベルト高校日本語教師）

● モデレーターである加藤眞司氏によるショートプレゼンテーション：日本では２０１１年度より小学校においての本格的な英語教育が始まりました。この新制度の目的は日本人の英語によるコミュニケーションを高めることであり、日本の英語教育が従来の文法重視型からコミュニケーション能力重視型へ推移していることを示唆しています。日本の生徒の英語コミュニケーション能力を高めるためにも、日米の学校間での交流プログラムは有効であると思われます。また、新規ＪＥＴプログラム参加者とＷＡＴＪ会員の間での交流プログラムを成功させるには、１．実現可能かどうか、２．継続的に続けられるものか、３．楽しいかどうか、の３点が重要であると考えます。

● Ｑ＆Ａセッションにおけるやりとり

新規ＪＥＴプログラム参加者から加藤亮氏への質問：交流プログラムやその他のプロジェクト等はＣＩＲだから可能だったのでしょうか。ＡＬＴ*^３が交流プロジェクトをすることは可能でしょうか。

加藤亮氏による回答：ＣＩＲであれ、ＡＬＴであれ、それぞれのＪＥＴプログラム参加者がどこに配置されるかにより状況は異なります。ただし、小規模な地方自治体の方がより様々な活動ができるように思います。何か新しい交流プロジェクトを始める際には各地方自治体にあるＪＥＴプログラム参加者の集まりであるＡＪＥＴ（Association of ＪＥＴs）が重要な情報源となるでしょう。

田染多江子女史による回答：当地の学校で日本語授業を履修した経験のある新規JETプログラム参加者には、交流プログラムをはじめるにあたり、かつて日本語を習った教師に連絡を取ることをお勧めします。当地の日本語教師には、JETプログラム参加者となった教え子と連絡を取り、彼らの要望があればできるだけ答えるようにしていただくよう、お願いしたいと思います。

加藤眞司氏による回答：交流プログラムを始める際に、日本語教師、JETプログラム参加者、その他人物交流に携わっている者に関する情報及び交流プログラムに関する情報を包括的に集約できるセンターのようなものを設立することを提案したいと思います。

＊１ C I R：JETプログラムにおける職種の一つ。地域において国際交流活動に従事する国際交流員のこと。

＊２ J－LEAPプログラム：国際交流基金によって行われている「米国若手日本語教員」プログラムのこと。このプログラム参加者は日本語指導助手として米国の高校に2年間派遣される。

＊３ A L T：JETプログラムにおける職種の一つ。小学校・中学校や高校で語学指導に従事する外国語指導助手のこと。

